

恐しき通夜

海野十三

青空文庫

1

「一体どうしたというんだらう。大變に遅いじゃないか」

まゆ ひそ
眉を顰めて、

吐きだすように云つたのは、あか赭らがお顔の、でつぶり

肥つた川波船かわなみふねじ一大尉だつた。

窓の外は真暗で、いんうつ陰鬱なれいき冷気が

ヒシヒシと、薄い窓硝子ガラスをとおして、忍びこんでくるのが感じら

れた。

「ほう、もう八時に二分しか無いね。先生、また女の患者にでも

つかま掴つてんのじゃないか」

腕時計の硝子蓋ガラスぶたを、白い実験着の袖そでで、ちよいと丸く拭ぬぐいをかけて、そう皮肉つたのは白皙はくせき長身の理学士星宮羊吾ほしみやようごだつた。これは第三航空試験所の一部、室内には二人の外誰も見えない。だがこの二十坪ばかりの実験室には、所も狭いほど、大きな試験台や、金具かなぐがピカピカ光る複雑な測定器や、頑丈がんじょうな鉄フレイムの枠かこまに囲れた電気機械などが押しならんでいて、四面の鼠色ねずみいろの壁へきた体いの上には、妖怪ようかいの行列をみるようなグロテスク極きわまる大きい影いが、匍はいのぼつているのだつた。

「キ、キ、キ、キキキツ」

ああ厭いやな鳴き声だ。

ホト、ホトと、入口の重い扉との叩たたかれる音。二人は、顔を見合

わせた。

クルクルと把^{ハンドル}手の廻る音がして、扉^{ドア}がしずかに開く。そのあとから、ソツと顔が出た。

色の浅ぐろい、苦味^{にがみ}の走ったキリリとした顔の持ち主——大^{おおあ}

蘆原^{しはら}軍医だった。

室内の先^{せんきやく}客である川波大尉と星宮理学士との二人が、同時にハアーツと溜息^{ためいき}をつくくと、同時に言葉をかけた。

「遅いじゃないか。どうしたのか」と大尉。

「あまり静かに入ってきたので、また気が変な女でもやってきたのかと思つたよ。ハツハツハツ」と星宮理学士が、作つたような笑い方をした。

「いや、遅くなった。患者かんじやが来たもんで（と、『患者』という言葉に力を入れて発音しながら）手間がとれちまつた。だが、お詫わびの印しるしに、お土産を持ってきたよ、ほら……」

そういつて大蘆原軍医は、入口のところでは何やら筴ざるの中に盛りあがった真黒なものを、さしあげてみせた。

「何じゃ、それは……」

「栄螺さざえじゃよ、今日の徹夜実験の記念に、僕がうまく料理をして、御馳走をしてやるからね」大蘆原軍医はそう云つてから、筴ざるの中から、一番大きな栄螺を掴つかみあげると、二人のいる卓上テーブルのところまで持つてきた。磯いその香かがプーンと高く、三人の鼻をうつつた。すばらしく大きい、獲とれたばかりと肯うなずかれる新鮮な栄螺だった。

「大きな栄螺じゃな」と大尉は喜んだ。

「軍医殿は、人間のお料理ばかりかと思つていたら、栄螺のお料理も、おたつしやなんだね」と、星宮理学士が野次つた。

そこで三人の間にどつと爆笑が起つた。だが反響の多いこの室内の爆笑は大変賑かだつたが、一旦それが消えてしまふとなると、反動的に、墓場のような静寂がヒシヒシと迫つてくるのだつた。

「キキキツ」

とまた鳴いた。

「可哀想に、鳴いているな」そう云つて大蘆原軍医は、大きい鉄棒のなかを覗きこんだ。そこには大きな針金で拵えた籠がある。

つて、よく肥ったモルモットが三十匹ほど、藁床わらどこの上をゴソゴソ匍もいまわっていた。

「じゃ、そろそろ実験にとりかかろうじやないか」と星宮理学士が、腰をあげて、長身をスツクリと伸のばした。

「よかろう」研究班長の川波大尉は、実験方針書とするしてある仮かり綴とじの本を片手に掴つかみあげた。「第一測定は、午後九時カツキリにするとして、まず実験準備の方をテストすることにしよう。

大蘆原軍医殿に、モルモットを硝子鐘ガラスがねのなかに移して貰おう。それから、星宮君は、すぐ真空唧筒しんくうポンプを回まわ転わしてくれ給え」

航空大尉と、理学士と、軍医との協同実験が始まった。これは川波大尉が担任する研究題目で、航空学に関する動物実験なので、

気圧の低くなつた硝子鐘ガラスがねのなかに棲息せいそくするモルモットの能力について、これから一時間毎に、観測をしてゆこうというのだつた。大尉は専らもっぱ指揮を、理学士は器械部の目盛を読むことを、そして軍医がモルモットの動物反応を記録するのが役目だつた。この三人の学者は、毎時間に、五分間を観測と記録に費すついやと、故障の突発しないかぎり、あとの五十五分間というものを過あごすのはなはだ退屈たいくつを感じるのでつた。

2

「この調子で、明け方まで頑張るのは、ちと辛いね」と大蘆原軍医が、ポケット・ウイスキーの小さいアルミニウム製のコップを、コトリと卓^{テーブル}上の上に置きながら云うのだった。

「軍医どこの栄螺^{さざえ}料理が無ければ、儂^{わし}は五十五分間ずつ寝るつもりだった」と川波大尉が、ポカポカ湯気^{ゆげ}のあがっている真黒の栄螺の壺^{つぼ}を片手にとりあげ、お汁をチュツと吸ってから、そう云った。

「大蘆原軍医殿は、この栄螺の内臓を珍^{ちんちよう}重^{じゆう}されるようだが、僕はこんな味のものだとは、今日の今日まで知らなかった」と、星宮理学士は、長い箸^{はし}を器用に使って、黄色味がかかったプリプリ

するものを挟みあげると、ヒョイと口の中に抛りこんで、ムシヤと甘味うまそうに喰べた。

「そうです、これは一種異様の味がするでしょう。お気に入りしましたか星宮君」と軍医は照れたような薄笑いを浮べ、ダンディらしい星宮理学士の口許くちもとに射るような視線をおくった。

「そうかね、僕の方の榮螺は、別に変った味もないが、どうれ……」と大尉は、向うから箸をのばして、星宮理学士の壺焼の中を摘もうとした。

「吁あツ、川波大尉」駭おどろいたように軍医はそれを遮さえぎった。「まだ榮螺は、こつちにもドツサリありますから、こつちのをおとり下さい。なにも、星宮君が陶酔とうすいしている分をお取りなさらなくても

……」

そういつて、何故か軍医は、大尉の前に別の壺焼を置いたのだつた。

「あ、そうか、これはすまない」と、大尉はちよつと機嫌を損じたが、アルコールの加減で、すぐ又元のような上機嫌に回復した。「こんなに新しいと、いくらでも喰えるね」

「いや、今僕の喰ったやつは、中で一番違つた味をもつていてね、珍らしい栄螺からだつた」と、理学士はまだ惜しそうに、空になつた殻からを振り、奥の方に箸をつきこみながら、舌なめずりをした。

「やあ、いくら突ついても、もうでてこないや」

「僕の御馳走が、お気に召してきようしゆく恐縮だ」大蘆原軍医は、ウイ

スキーをつぎこんでも、一向赤くならない顔をあげていった。

「だが、食うものがボツボツ無くなり、こう腹の皮が突つ張つてきたのでは、一層睡くなるばかりだね。——それじゃ、どうだろう。これから皆で、一時間ずつ交替で、なにかこう体験というか、実話というか、兎とに角かく、睡気ねむけを醒さます効目ききめのある話——それもなるだけ、あまり誰にも知られていないという話やつを、此の場かぎりという条件で、喋しゃべることにしちや、どうだろうかね」

「ウン、そりや面白い」と星宮理学士が、すぐ合あいづち槌ちをうった。

「いま九時をすこし廻まわつたところだから、これから十時、十一時、十二時と、丁ちようど度ど真夜中まよなかまでに、三人の話が一とまわりするんじゃない。川波大尉殿、まず君から、なにかソノ秘話ひわといつたようなも

のを始め給え」

「儂わしに口を開かせるなんて、罪なことだと思うが」と川波大尉は、ちよつと丸まる苳がりの坊主頭ぼうずあたまをクルリと撫なでながら、「どうせ三人きりのことだ。一人脱ぬけたつて面白くあるまい。それじゃ、何か話そうか、ハテどんなことを喋しゃべったものか……」

第一話 川波大尉の話

「おおあしはら大蘆原さんが云つたとおり、本当にこれは此場このばかぎりの話な

んだが、一昨年おとしの秋の事、南太平洋で海軍の特別大演習があつた時の事だったが、演習もいよいよ峠とうげが見えて来た四日目。場所は、退却を余儀なくされている青軍せいぐんの最前線にあたる土佐湾とさわんの南方五十哩カイリの洋上だった。

儂は、この青軍の航空母艦『黄鷺きわし』に乗っていて、戦闘機を一
台受持つてた。こいつは最新型というやつではないが、儂わたち達には永年ながねん馴染なじみの、非常に使いよい飛行機だった。当時儂の配属はいぞくは、第十三戦隊の司令で、僚機りょうきとして、同型の戦闘機二台を引率んそつしていたのだった。わが青軍の根拠地の土佐湾は、いよいよ持ちきれなくなつて、横須賀軍港よこすかぐんこうへ引移ることに決定した。多分、その日の夜に入ると、北ほく上じょうしてきた赤軍せきぐんは、勢いに乗

じて、大^{たい}拳^{きよ}土^と佐^さ湾^{わん}の夜^や襲^{しゆう}戦^{せん}を展開^{てんぱん}することだろうと、想像^{さうざう}された。その時刻^{じこく}までに、わが青^{せい}軍^{ぐん}の主力^{しゆりき}は、前^{ぜん}夜^や魚^{ぎよ}雷^{らい}に見^み舞^まわられて速^{すみ}力^{りき}が半^{はん}分に墜^おちた元^{もと}の旗^き艦^{かん}『釧^{くし}路^ろ』を掩^{えん}護^ごして、うまく逃げ落^おちねばならなかつた。それには日^{にち}没^{ぼつ}前^{ぜん}まで、航^{かう}空^{くう}母^ぼ艦^{かん}『黄^{わう}鷲^{しゆ}』を中心^{ちゆうしん}とする航^{かう}空^{くう}戦^{せん}隊^{たい}が、赤^{せき}軍^{ぐん}の出^いてくる鼻^び先^{せん}を、なんとかして喰^くい留^とめねばならなかつたのだつた。

儂^{わしたち}達^{だち}の戦^{せん}闘^{とう}第^{だい}十^{じゅう}三^{さん}戦^{せん}隊^{たい}の三^{さん}機^きは、幾^{いく}度^たとなく母^ぼ艦^{かん}の滑^{かつ}走^{そう}甲^{かん}板^{ばん}から、空^{くう}中^{ちゆう}へ急^{きゅう}角^{かく}度^どに舞^まいあがって、敵^{てき}機^きとわたり合^あひ、軽^{けい}巡^{じゆん}の戦^{せん}隊^{たい}を脅^{おび}かした。儂^{わしたち}達^{だち}の戦^{せん}隊^{たい}の活^{かつ}躍^{やく}は、自^じ分^{ぶん}でいふのは少^{せう}しおかしいが、実^{じつ}に目^め覚^ざましものだつたよ。殊^{こと}に僚^{りょう}機^きの第^{だい}二^に号^{ごう}機^きに竹^{たけ}花^{はな}中^{ちゆう}尉^ゐ、第^{だい}三^{さん}号^{ごう}機^きには熊^{くま}内^{ない}中^{ちゆう}尉^ゐが单^{たん}身^{しん}乗^{じやう}りこん

でいたが、その水際みずぎわだった操縦みぎぶりは、演習という気分をとおりすぎて、むしろ実戦かと思われるほど壮快無比なもので、イヤ壮快すぎて、物もの凄すごいと云った方が当っているくらいだった。いつも三機雁行がんこうの、その先登に立っていた司令機内のこの儂は、はんしゃとつめんきよう反射凸面鏡の中に写る僚機の、殺気だった戦鬪ぶりを、ちよいちよい眺めては、すくなからず心配になつてきたものだ。夕刻に近づくと、かねて氣象警報が出ていたとおり、灰色の雲は低く低くたれ下つて来、白く浪立なみだつてきた洋上に、霧がすこしずつ濃くなつてくるのだつた。

(今夜は、どうしても一ひと嵐あらしくるな)

味方にとっては、いよいよ事態は不幸に向つていった。西かたむに傾

いた太陽は、密みつうん雲の蔭にスツカリ隠れてしまったり、そうかと思ふと急にその切れ目から顔を現わして、真赤な光線を、機翼きよくに叩きつけるのだった。丁度、そのときだった。あの一だいちんじ大椿事が突発したのは……。

ここまで云えば、君達も感付いたろうが、この椿事は、翌朝の新聞紙に『大演習の犠牲。青軍の戦闘機二機、空中衝突して太平洋上に墜つ。乗組の竹花、熊内両中尉の死体も機影きえいも共に発見せられず。原因は密みつうん雲のためか……』などと書きたてられたあの事件なのだ。海軍当局の調査も、新聞の報ずるところとは大した相違がなかった。無論、現げんじょう場付近にいた唯一ゆいいつの人間である儂は、調査委員会の席上で証言をさせられてこんなことを云った。

『青軍せいぐんの危急ききゆうを救うべく、敵前てきぜんに於おいて危険きけんきわまる低空ていくうの急旋転きゆうせんてんを行ないたるところ、折柄おりから洋上やうじやうには密雲みつうんのために陽光やうかう暗く、加うるに霧きりやや濃く、僚機りやうきとの連絡れんらく至難しじなんとなり、遂ついに空中衝突くうちゆうつうを惹起じやつきせるものなり』てなことを云つたので、不可抗力ふかこうりよくの椿事ちんじとして、両中尉りやうちゆういは戦死せんじと同格どうかくの荣誉おんぎを担になつたわけだった。だが此処ここに話がある！

儂は僚友りやうゆうのために、実は偽りいつわの報告ほうこくをしたのだった。事實はこうだった、いいかね。あるとき、洋上やうじやうを飛翔ひしやうしていた儂は、いつの間いつのまににやら僚機りやうきから遠く離れてしまつてゐるのに気がついたのだった。吃驚びつくりして後を見つると、遙か下の空で、二機はしきりに横転おうてんをやつてゐるじゃないか。これは無論、儂の指令しんれいじゃない。

なにか故障を起したのかなとも考えたので、儂は方向舵を静かに廻しながら、なお尚も注意していると、どうも故障とは様子がちがう。一機が他の一機を執拗しつように追いかけているようなのだ。一機が、思いきつた逆宙返りをうって遁のがれると、他の一機も更に鮮あざやかな宙返りをうって迫り、機翼と機翼とがスレスレになるのだった。儂は、この追駆おいかけごつこが、冗談ではないことに直ぐ気がついた。このまま抛ほうつて置けば、二人とも死ぬ。何とかして二人を引離す頓智とんちはないものかと考えたが、咄嗟とつさのこととて巧うまい術す策べが浮かんでこない。

望遠鏡を目にあてて、よくよく眺めてみると、齒を剥むいて追っかけている方は、熊内中尉だった。追いかけているのは竹花

中尉、中尉の顔が、丁度雲間から現われた斜陽を真正面に浴びて、儂のレンズの底にハッキリと映じたが、彼は飛行帽も眼鏡もなぐり捨てて、片手を空しく顔前にうち振り、彼の顔はキリストの前に立った罪人のように、百の憐愍を請うているのだった。

『おれが悪かった！ 何でも後から相談に應じるから、おれを死なせないで呉れ給え』と、そんな風に見える真青の顔だった。

そして尚も、助かろうとして逃げた。竹花中尉には、熊内中尉の恐ろしい決心のほどが、ハッキリと判るのだった。

実は二人の間には、こんな訳があるのだった。二人は元々K県出の、たいへん仲の善い僚友だったが、あの事件の時から一年程前に、儂も識っているがAという若い女が、二人の間近かに

現われてからというものは、急に二人は背そむいて行つた。そのAという女は、非常に眼と唇とのうつくしい、そして色がぬけるように白くて、真紅な帯や、真紅な模様の羽織なんかがよく似合う少女だった。笑うと、ちよいと開いた唇の間から、真白な糸いと切り歯ばがニツと出てくるのが、また何とも云えない程可愛らしく見えた。そのAさんという少女に、二人が同時に惚れこんだのも、全く無理のないことだった。しかしお互に、相手の気持を知ると、二人は二十幾年の友情も、プツツリ忘れてしまった。彼等は、表面は何喰わぬ顔で勤務をしていながら、内心では蛇と狼とのように睨にらみ合あっていたのだ。彼等は悪あく辣くらつな手段で、お互たがを陥おとれ合あった。自分の血で、相手の骨を洗つた。

その結果、Aという女は、遂に竹花中尉の方へ傾いてゆき結納^うまでとりかわされ、この演習が済むと、直ちに水交社^{すいこうしゃ}で婚礼が挙げられることにまで、事がきまつていたのだった。あわれ、恋に敗れた熊内中尉は、悪魔におのが良心を啄^{つば}むに委せた。そこで中尉の恐ろしい復讐が計画されたのだった。

『竹花にあの女を与えてなるものか。また、自分を此処まで引張^{ひっぱ}りまわした女に、素直に幸福を与えてなるものか』そういつて熊内中尉は齒を喰いしばったのだった。『ようし、見て居^おれ、竹花のやつを、地獄へひきずりこんでやるんだ。やつが、おれの計画に感付いたとき、どんな泣きツ面^{つづ}面^{めん}をするか。そいつを見るのが、ああ、せめてもの娯^{たの}しみだ。吠^ほえろ、喚^{わめ}け、竹花中尉！』

熊内中尉の計画は見事に効を奏したのだった。儂があの時覗いた竹花中尉の『死』への反発『生』への執しゅうちやく着はに腫れあがった相そうぼう貌ぼうは、あさましいというよりは、悪鬼のように物凄いものだった。さすがの儂も眼を蔽おおつた。やがて気がついてみると、二機は互に相手の胴中を噛かみ合あつたような形になり、引裂かれた黄色い機翼からを搦からませあい、白煙をあげ海面目懸けて墜落してゆくのが見えた。それが遂に最後だった。戯たわむれに恋はすまじ、戯れでなくとも恋はすまじ、そんなことを痛感したのだった。儂は、あの日のことを思い出すと、今でも心臓こころが怪しい鼓動こどうをたてはじめるのじやよ」

そう云って川波大尉は、額の上に水みず珠だまのように浮き出でた油

汗を、ソツと拭ぬぐったのだった。丁度ちようどその時、時計は午後十時のところに針が重かさなったので、三人はその儘まま、黙々もくもくと立って、測定装置の前に、並んだのだった。

3

第二話 星宮理学士の話

「さて僕には、川波大尉殿のような、りようきたん 獵奇譚の持ち合わせが一向にないのだ。といって引下るのも甚だ相濟まんと思うので、僕自身に相応した恋愛戦術でも公開することにしよう。

さつき、大尉どのは、『戯れに恋はすまじ、戯れならずとも恋はすまじ』と、ぜんぼうず 禅坊主か しゆうどういん 修道院生徒のような せいく 聖句を吐かれたが、僕は、どうかと思うね。それなら、ちよいと うかが 伺つてみたい一条がある、とでもねじ込みたい。大尉どのは、あの うるわ 麗しい奥様のことなんだ。あんな見事な れいじん 麗人をお持ちでいて、『恋はすまじ』は、すさまじいと思うネ。僕は くわ 詳しいことは一向知らないけれど、余程のロマンスでもないかぎり、大尉どのは、あの れいじん 麗人 ふんがい 憤慨せられ ふんがい 憤慨せられ

るかも知れないけれどね——。で僕に忌憚きたんなく云わせると、大尉どのの結論は、本心の暴露ばくろではなく、何かこう為めにせんとするところの仮面結論かめんけつろんだと思うのだ。大尉どのの真意しんいは何処にある？ こいつは面白い問題だ——と、イヤにむきになつて喰つてかかるような口を利くのも、実はこうしないと、これからの僕の下手な話が、睡魔すいまを誘さそうことになりはしないかと、心配になるのでね。

そこで、僕に云わせると、失恋きよくの極、命をなげだして、恋こいがた敵きと無理心中をやつた熊内中尉は、大馬鹿者だと思ふ。鰻うなぎの香を嗅いだに終つた竹花中尉も、小馬鹿こばかぐらいのところさ。何故つて云えば、熊内中尉の場合に於て、Aとか云う女を手に入れるこ

とは、ちよつとしたトリツクと手腕さえあれば、なんの苦もなく手に入るのだつた。Aは竹花中尉と結婚することにはなつていないが、熊内中尉を別に毛虫のようにしん芯から嫌つてゐるわけではないのだから、いくらでも、竹花中尉との縁組えんぐみをAに自らすすんで破らせる位のことには、なんなくできるんだ。何しろ相手は、東西も判らない未婚の娘なんじゃないか。

人の細君は誘惑できないというのが僕は二日で手に入れた記録がある。その細君を仮りに——そうだねB子夫人と名付けて置こう。色が牛乳のように白く、可愛かわい桜桃さくらんぼのように弾力のある下唇をもつていて、すこし近視らしいが円つぶらな眼には湿つたように光沢こうたくのある長い睫毛まつげが、美しい双曲線をなして、並んでいた――

—というと、なんだか、川波大尉どののお話のAさんという少女に似ているところもあるようだね。とにかく其のB子夫人は、僕の食アペタイト慾を激しくあおりあげたのだった。食慾を感ずるのは、胃袋が悪いんだろうか、その唆そそのかすような甘い香かを持った紅い果実が悪いのだろうか、どっちだろうかと考えたほどだった。だが、僕は日頃の信念に随って、飽あくまで科学的に冷静だった。筋書どおりにチャンスが向うからやって来るまで、なんの積極的な行動もとらなかつた。

臆やがてチャンスは思いがけなく急速にやって来た。というのは、B子がその夫君ハズと四五日間きま氣拙まい日を送った。その動機は、僅かの金が無いことから起つたのだった。その次の日は、彼女の夫君ハズ

が出張に出かけることまで僕のところには解っていた。B子夫人はその日、某デパートへ買い物のため、彼女の郊外の家を出掛けたが、その道すがら突然アパツシユの一団に襲われたのだった。小暗い森蔭こくら もりかげに連れ込まれて、あわや狼藉ろうぜきというところへ飛び出したのが僕だった。諸君はそのような馬鹿なことがと嗤わらうかもしれないが、B子夫人も普通の婦女とおなじく、この昔風な狂言暴行を疑いもせで、泪なみだを流して僕に感謝したばかりか、記念のためというので、奇妙な彫ほりの指環ゆびわまで贈物として僕によこしたじゃないか。そのとき僕は、『御主人には黙っていられた方がいいですよ』と云うことを忘れなかった。心に空虚のあつたB子夫人が、その胸に如何なる夢を描いたことや、また其の夫君ハズが出張にで

かけた翌日、偶然のように訪ねていった僕をどんなに歓待したか。女なんか、新しがつても、本当は古い古いものなのさ」

こう云つて星宮学士が、胸の底まで気持よく吸いこんだ煙草の烟を、フーツと静かに吐きだしたが、この話を傍できいていた川波大尉の顔がんめん一面が、急にひきつるように硬こわばつてきたのに、まるで気がつかないような顔をしていたのだった。

「それから、こんな話もある」と学士は第二話のつづきを又語り始めるのだった。「こいつは、僕が一番骨を折つた女だったが、カツキリ半年も懸つた。無論その半年の間、僕はこの女ばかりを覗ねらつていたのでは無く、沢山の若い女を獵あさりあるいて其その片か手間たてまに、一つの長篇小説でも書くつもりで、じっくり襲いかかつ

て行つたのだ。その女は、しつかりした家庭に育つた九條武子くじょうたけこのようなノーブルなお嬢さんだつた。彼女の名前を、仮りにC子（とそう云つて、星宮学士は何故かハツと呼吸を止めた）——そう、C子と呼ぼう。この少女は、はちきれるような素晴らしい肉体を持つているのに、精神的には不感性ふかんしょうに等しく、無類の潔けつぱ癖きだつた。すべて彼女の背後にある厳格な教育が、彼女をそうさせたのだつた。二三度誘つたが、こりや駄目だと思つた。そのまましようみで賞味しょうみしてしまう手段はあつたが、それでは充分美味おいしく戴いたけない。そう悟つたので、僕は一夜脳髓をしばつて、最も科学的な方法を案出した。幸い僕は家庭教師として、彼女に数学を教える役目を得たので、それで時々会つては、音楽会に誘つた。次

は映画の会へ連れてった。その映画も、教育映画から次第にロマ
ンティックなものへ、それから辛^{かろ}うじて上演禁止を免れたカット
だらけの映画へ、更にすすんではカットのない試写ものへと移つ
て行つた。彼女は別に眉を顰^{しか}めはしなかつた。というのは、この
速力が如何にも緩慢だつたからだ。映画を見あきると、レヴィウ
を見た。宝^{たからづか}塚の可愛いレヴィウから、カジノ・フオリー、
プペ・ダンサントと進み、北村富子一座などというエロ・ダンス
へ移り、アパツシユ・ダンスを観た。C子が僕と踊りたいといい
出したのは恰^{ちようど}度その頃だつた。僕は一応それを押しとどめたが、
それは無論、手だつた。興奮しきつた彼女は、僕の忠告に、倍以
上の反^{はんぱつ}発をもつて舞^{ぶよう}踊を強いた。僕達は、あの淫^{いんわい}猥なアクロ

バティック・ダンスを見て帰ると、其の次の日には、僕の室をすつかり閉めきつて、二人で昨夜のダンスを真似てみるのだった。勿論^{もちろん}何の経験ももたない僕達に、あんなに激しいダンスが踊れるわけはなかった。僕達は不意に手を離してしまつて床の上に^{どう}と抛げだされて瘤^{こぶ}を拵^{こしら}えたり、ドツと衄^{はなぢ}血を出したり、筋をちがえた片腕を肩に釣つて疼痛^{とうつう}にボロボロ涙を流しながらも、奇怪なる舞踊をつづけたのだった。だが僕達の身体は清^{せい}浄^{じよう}で、C子はまだ処女だった。時分はよしと、僕は彼女を、秘密室のあるダンス場めぐりに連れ出したのだった。それから四五日経つて、C子は逆に僕を挑^{いど}んだのだ。だが僕は素^そ気^けなく拒絶した。拒絶される^{かえ}と反つて嵐のような興奮がC子の全身に植えつけられたのだ

つた。すべて僕の注文どおりだった。其の翌日、僕は、六ヶ月か
 かつて発酵はつこうさせたC子という豊潤ほうじゆんな美酒びしゆを、しみじみと味
 わったことだった。

こうして僕が味わった女の数は、百を越えている。こんなこと
 を、貞操ていそう蹂躪じゆうりんとか色魔しきまとか云つて大騒ぎする奴の気が知れな
 い。『洗滌せんじようすれば、なにごともなかったと同じように清浄に
 なるのだ』とロシアの若い女たちは云っているじゃないか。それ
 に違いない。誰もが、徹底して考えて実行すればいいのだ。そり
 や中には捨てた女からピストルをつきつけられることもあるが、
 何でもない。万一射ちころされたとしても散々さんざん甘味うまみな酒に酔いよ
 痴しれたあとの僕にとって『死』はなんの苦痛でもなければ、制裁

とも感じない。僕の家の机の上にはふくよかな肘突ひじつきがあるが、その肘突の赤と黒との縮緬ちりめんの下に入っているものは、実は僕が関係した女たちから、コツソリ引き抜いてきた……」

「オイ星宮君、十一時がきた！」と、此の時横合いから口を入れた大蘆原軍医の声は、調子外ちようしはずれに皺枯しわがれていた。

4

第三話 大蘆原軍医の話

「それでは私が、今夜の通夜物語の第三話を始めることにしよう」
そう云つて軍医はスリー・キャツスルに火をつけた。

「川波大尉どのお話といま聞いたばかりの星宮君の話とは全然
内容がちがつている癖に、恋愛論とか性愛論とか、それ
が含まれているところには、一種連続点があるようだ。そこで、
私の話も、勢いその後を引継いだように進めるのが、面白いよう
に思う。ところが丁度ここに偶然、第三話として、まことに恰好
な物語があるんだ。そいつを話すことにしよう。

実は今夜、私がここへ出勤するのが、常日頃に似合わず、大変

遅れてしまつて、諸君に御迷惑をかけたが（と云つて軍医は軽く頭を下げた）何故私が手間どつたのか、それについてお話ししよう。

今夜七時、私の自宅に開いている医院に、一人の婦人患者がやつてきたのだ。美貌びぼうのせいもあるだろうが、二十を過ぎたとは見えぬうら若い女性だった。その、少女とでも云いたいような彼女が、私に受けたいというのは、実は人工流産だというんだ。一体、人工流産をさせるには、医学的に相当の理由が無くては、開業医といえどもウツカリ手を下せないのだ。母体が肺結核はいけつかくとか慢まんせ性腎臓炎いじんぞうえんであるとかで、胎児たいじの成長や分娩ぶんべんやが、母体の生命おびやかを脅すような場合とか、母体が悪質の遺伝病を持つている場合とかに始めて人工流産をすることが、法律で許されてある。若しも

これに反して、別段母体が危険に瀕^{ひん}してもいないのに、人工流産を施^{ほどこ}すと、その医者は無論のこと、患者も共ども、墮^だ胎^{たい}罪^{ざい}として、起訴されなければならぬ。

さて、その若い女の全身に互^{わた}つて、精密な診断を施したところ、人工流産を施^{ほどこ}すべきや否^{いな}やについて、非常に困難な判断が要るところが判つた。それというのが、打ちみたところ、この女は立派に成熟していたが、すこし心^{しん}神^{しん}にやや過度の消^{しょう}耗^{もう}があり、左^ひ肺^{はい}尖^{せん}に軽^び微^{じやく}ながら心配の種になるラッセル音が聴こえるのだ。この患者の体力消耗が一時的現象で、このまま回復するのだと、肺尖^{はいせん}加^か答^か児^{かた}も間もなく治癒^{ちゆ}するだろうから、折角始めて得た^{こだから}子^こ宝^{たから}のこともあり、流産をさせないで其^まの儘^ま、正^{せい}規^{けい}分^{ぶん}娩^{めん}にま

で進ませていいのだ。だが若し、この消耗が恢復せず、更に悪化するようなら、断然^{だんぜん}流産をさせて置く方がよろしい。しからは、この女性について、見込みはいずれであろうか、と考えると、これがどっちにも考えられるのだ。私として、これは惑わざるを得ない事柄だった。

『もう一ト^ヒ月待ってみませんか』

と私は云いたいところだ。しかし、一ヶ月後の人工流産では、すこし大きくなりすぎているので、母体の余後が少し案ぜられるのだった。けれども、私はそんなことを口に出して云わなかつた。それというのが、以前この女の口から^{なみだ}涙をもつて聞かされた話があるからなのだ。

この若い女には、彼女の胎児にパパと呼ばせる男がなかったのだ。と云つて、その男が死んでしまったわけではない。早く云えばこの女は、親の許さぬ或る男に身を委せ、とうとう妊娠して仕舞つたのだ。男は、幣履のごとく、この女をふり捨ててしまつたのだつた。彼女は、星宮君の云うが如きロシアの女には、なりきれなかつたのだ。棄てられてしまうと、彼女はやつと目が覚めた。貞操を弄ばれた悔恨が、彼女の小さい胸に、深い深い溝を刻みこんだ。それからというものは、彼女は人が変つたように終日おのれの小さい室に引籠つて、家人にさえ顔を合わすのを厭がつたが、遂には極度の神経衰弱に陥り、一時は、あられもない事を口走るようになってしまつたのだつた。

彼女の家庭のひとびとは、彼女を捨てたその男を呪^{のろ}つてやまなかつた。中でも一番ふかい憤怒^{ふんぬ}をいだいたのは、次兄にあたる人だつた。次兄は彼女が幼いときから、特別に彼女を可愛いがつていたのだつた。

『大きくなつたら、あたいのお嫁さんに貰おうかなア』

などと云つて両親や、伯母たちに散々笑われたほどだつた。そんなに可愛いがつた妹が、救^{すく}う途^{みち}のない汚辱^{おじよく}に泣き暮しているのを見ると、その次兄は、

『復讐^{ふくしゅう}だ、復讐だ！ きつと其の男を殺して、八ツ裂^ぎきにしてやるんだ。おれがその男を殺した廉^{かど}により、次の日、死刑にされたつていい』

と家中を嘯鳴^{どな}つて歩いたものだ。彼は復讐の方法をあれやこれやと考えたのだったが、遂には、それはすべて無駄だと判った。

それというのが、その男は、星宮君と同じような近代的の主義思想の男で殺されても一向制裁と感ぜないという種類の人物だった——とマア、斯^{かよう}様に連絡をつけて話をしないと、どうも面白味が出てこない」

軍医はポケットから手帛^{ハンカチ}を探しだして汗を拭いた。このとき南に面した硝子窓^{ガラスまど}が、カタコトと鳴って、やがてパラパラと高い音をたてて大粒の雨がうち当った。

「ほう、これはひどい雨になったな。——で其の次兄というのが、智恵袋^{ちえぶくろ}を、いくたびもいくたびも絞^{しぼ}りかえしているうちに、と

うとう彼は、その場に三尺も躍りあがるような、素晴らしい復ふくし讐ゆうを考えついたのだった。それは……」

と、ここまで大蘆原軍医が話してくると、どこかで、

「コトコト、コトコト……」

と扉ドアを叩くような物音がした。三人の男は、サツと顔色をかえると、一斉せいに入口の扉の方にふりむいたのだった。

「吁あッ！」

扉が、しずかに手前へ開いてゆく。

扉の蔭から、若い女の姿が現われた。ぴったり身体についた緋ひ色いろの洋装が、よく似合う美しい女だった。

「紅子——」

そう呼んだのは、川波大尉だった。それは、まぎ紛れもなく川波大尉夫人の紅子に違いなかつたのであつた。

「紅子、お前は一体、どうしてこんなよふけ夜更に、こんな場所までやって来たのだ」

「ちよいと、お顔がみたかつたのよ。それだけなの、おほほほほ」と紅子は笑いながら、悪びれた様子もなく一座を見まわした。

このときニヤリと笑つたのは、星宮学士だった。待ち構えたように、それを逸いちはや早く認めた川波大尉だった。彼は軍医の話をそちのけにして、スッキリ其の場に立ち上つた。

「紅子、お前にちよつと聞くが、儂が土耳其トルコで買つてきたといつた珍らしい彫刻のある指環を、お前にやって置いたが、先日そい

つを、どこかで失くしたと云ったね」

「エエそうですわ。でもあれは、もう済んだことじゃありませんの」と紅子は、丸い肩を、ちよつとすぼめるようにして云った。

「よオし、無いと判つてりや、よいのだ」大尉はそう云うとクルリと身をひるがえし、いきなり星宮学士の両腕をグツと掴つかんだ。「貴様

！ という貴様は、実に怪しからん奴だ。儂わしの女房を誘惑して置いて、よくもあんな無礼ぶれいきわまる口を叩いたな。死ぬのを怖れん

という貴様に、殺される苦痛がどんなものか教えてやるんだ！」

実験室の静せいじやく寂じやくと平和とは、古石垣ふるいしがきのようにガラガラと崩

れて行つた。

「ウフ。今になって気がついたか、可哀想な大尉どの。だが僕が

簡単に殺せると思ったら大間違いだよ」

「言うな、色魔^{しきま}！」

「なにを——」と星宮学士は、右のポケットにあるピストルを探りあてた。それを出そうと思って、大尉につかまれた右腕を離そうとして、必死に振りきった。ベリベリツという厭^いやな音がして、学士の洋服が引裂けると、右腕が急に自由になった。

(こうなると、こっちのものだ)

そう思った星宮学士は、ピストルを握った右の拳をグツと前にのばそうとした。そこを、

「エイ、ヤツ」

と大尉が飛びついて、両腕をグツと捻^ねじあげた。学士は捻^ねじら

れながらも、いきなり大尉の脇腹を力一杯

「ウン！」

と蹴とばしたが、この時遅し、大尉は素早く、身体を左に開いたので、気絶することから、辛うじて免れたが、その代り、二人の身体は、もつれあつたまま、もんどり打つて床の上に仆れてしまった。二人は跳ねおきようと、互に死物ぐるいの格闘をつづけ、机をひっくりかえし、書類箱を押したおしているうちに、どうした弾みか、ピストルが星宮理学士の手許をはなれ、ガチャンと音をたてて、向うの壁に叩きつけられた。

「さあ、この野郎。ほざけるなら、ほざいてみる！」

そう云つて、いかにも勝ちほこつた名乗をあげたのは、川波大

尉だった。星宮理学士は大尉の逞たくましい腕にその細首をねじあげられて、ほとんど宙にぶらさがっていた。が、どんな隙すきがあつたのだらうか、学士は両手を大尉の股間こかんにグツと落とすと、無我夢中になつて大尉の急所を掴つかんだのだつた。

「ウーム」

と大尉が呻うなつた。彼の顔は赤くなり、青くなりしたが、これも死にも狂いの形ぎようそう 相あひものすごく、学士の身体をグツと手許へよせると、骨も砕けよと敵手の頸くびを締めつけた。学士は朦朧もうろうと落ちてゆく意識のうちに、頻しきりに口を大きくひらいては喘あえいでいた。だが彼の執しゅうねん 念ねんぶかい両手は、なおも大尉の急所を掴んでそれを緩ゆるめようとはしなかつた。この儘ままに捨てておくと、二人と

も共きようやくかんけい軛關係において死の門をくぐるばかりだった。

「紅子、うう射て……ピストル、いいから……」

大尉の声は、切れ切れに、蚊かほそ細く、夫人の援助をもとめたのだ。
つた。

このとき紅子は、いつの間にやら、右手にしつかりとピストルを握りしめていたが、夫大尉のこの声をきくと、莞爾かんじとほほえんだ。

「いいこと！」

紅子のしなやかな腕がグツと前に伸びる。キラリとピストルの腹が光って、引金がカチリと引かれた。

「ズドン！」

銃声一発——大尉と学士とは、壁際かべぎわから同体に搦からみあつたま
ま、ズルズルと音をさせて、横たおに仆れた。

ピストルの煙が、やつと薄らいだとき、仆れた二人のうちの一
人が、フラフラと半身を起した。それは大尉にはあらで、意外に
も星宮理学士だった。

彼は、紅子が一発のもとに射ち殺したのは、彼女の夫君ふくんである
川波大尉だと知ると、咄嗟とっさのうちに氣をとり直し、威厳をつけて、
ノツソリ起きあがると、フラフラと紅子の方に歩みよるのだった。

「星宮君。ここへ懸け給え」

このとき、静かに云つたのは、この場の生命のやりとりに、一
と言も口を利かず、片腕もあげなかつた奇怪の人物、
大蘆原軍おおあしはらぐ

医いんいだった。自分の名をよばれると、流石さすがの星宮理学士も、ギョツとして、その場に立ち竦すくんだ。

「星宮君。私の第三話が、もうすこしで、尻切しりきれ蜻蛉とんぼになるところだった。幸い君は生命をとりとめたようだから、サアここへ坐つて、あの話の続きを聞いてくれ給え」

軍医は、落着きはらつて、空虚になつた二つの椅子を指した。学士は、眼に見えぬ糸あやつに操られるかのように、ヨロヨロとよろめきながら、やつとその椅子の傍まで近付くと、崩れるように、その上に腰を下ろした。

「……」

「さア、いいかね、星宮君。さつきは、僕に手術を頼んだ娘の次

兄というのが、素晴らしい復讐方法を、妹をかどわかした男に加えるため、考えついた、というところまで話したのだったね。サアその続きだが、さて、あの女の次兄が考えだしたあだう讐打ちというのはね、死をも怖れないと自称する人間に『死』以上の恐怖を与えることにあつたのだった。それで次兄は、今夜妹を人工流産させることに決心したのだ。手術は四十分ばかりかかったが、私の手で巧く終了した。摘出されたのは、すこし太い試験管の、約半分ばかりを占領している四ヶ月目の××××××××だった。いいかね、その試験管の底に沈ちんでん澱している胎児は、その男と、あの可憐れんなる少女とが、おのれの血と肉とを共に別けあつて生長させた彼等の真実の子供なのだった。でも母親の胎内を無理に引離され、

こうしているその胎児には、もうすでに生命が通っていないのだ
 った。闇から闇へ流れさった、その不幸な胎児の、今日は命日な
 のだ。その胎児にとって、今夜のこの話は、本当の意味の通夜つやもの
 物語がたりなのだ。

これだけ云えば、星宮君、君にはなにもかも判つたろう。あの
 胎児の父は、君なのだ。あの胎児の母は、ちどり子こと呼ぶ。さて
 此処ここで、君から訊きかして貰もらいたいことがある。君に返事ができる
 かね。

先刻さつき、君は私の手料理になる栄螺さざえを、鰐腹たらふく喰たべてくれたね。
 ことに君は、×××××、箸はしの尖端さきに摘つまみあげて、こいつは甘味うまい
 といつて、嬉うれしそうに食べたことを覚えてるだろうね。

それで若し、私が、あのちどり子の次兄であつたとして、いや
 そう驚かなくてもいいよ、先刻、君が口中で味い、胃袋へおとし、
 唯今は胃壁から吸収してしまつたであらうと思われる、アノ××
 ××が、榮螺さざえの内臓でなくして、実は、君の血肉ちにくを別わけた、あの
 胎児たいじだつたとしたら、ハテ君は矢張り、

『×××××を、ムシヤムシヤ喰べてみたが、たいへんに美味おいしか
 つた』

と嬉しがつて呉れるだろうか、ねえ星宮君——」

「ウム。知らなかつたツ」

と、ふり絞るような声をあげたのは星宮理学士だつた。その顔
 面はみるみる真青まっさおになり、ガタガタと細かく全身を震ふるわせると、

われとわが咽喉のどのあたりを、両手で搔かきむしるのだった。

ああ、時はもうすでに遅かった。いま気がついて、ムカムカと瀉はき気けを催しても、彼の喰った榮螺は、もはや半ば以上消化され、胃壁を通じて濁った血となつたのだつた。頸動脈けいどうみやくを切断して、ドンドンその濁った血潮ちしおをかいだしても、かい出し尽せるものはなかつた。彼の肉塊にくかいをいちいち引裂いて火の中に投じても、焼き尽せるものではなかつた。彼は自己嫌悪の全身的な嘔吐おうとと、極度の恐怖とを感ずると、

「ギヤツ」

と一声、獣のような悲鳴をあげて、その場に卒倒したのだった。呪われたる人喰人種——。

×

それを見届けると、大蘆原軍医は始めて莞爾かんじと笑って、側かたわらに擦すりよつてくる紅子の手をとつて、入口の扉との方にむかつて歩きだした。

今宵、紅子は、彼女の良人おつと、川波大尉を射殺して置きながら、それを振返つてみようともしないのは、どうしたことであるか。

それは、川波大尉こそは、第一話に出て来た熊内中尉に、あの恐ろしい無理心中しそを使し嘸せうした悪漢だった。そのために、当時、鮎あゆか川紅子わべにこと名乗つていた彼女は、愛の殿堂でんどうにまつりあげておいた婚約者の竹花中尉を、永遠えいに喪うしなつてしまったのだった。

いわば、今宵こよいの良人射殺事件おつとは、あたかも竹花中尉の敵打かたきうち

をしたようなものだった。この隠れた事実を、紅子が知ったのは、極く最近のことで、それを教えたのは、炯眼けいがんきまわる大蘆原軍医だった。今夜の紅子の登場も、無論、軍医の書いたプログラムの一つだった。

ここへ来て、この軍医を賞讃する前に、読者諸君は、すこし考えてみなければならぬ。それは、いくら愛する妹の復讐とは云え、彼女の産みおとしたものを、人間に喰わせるという手段が、人道上許されるものであろうかどうか。奇怪にも友人の細君だった婦人を、狎なれ狎なれしく、かき抱いてゆく大蘆原軍医は、誰よりも一番恐ろしい、鬼か魔かといふべき人物ではあるまいか。

それはそれとして、二人の姿が、戸外の闇まぎに紛れて、見えなく

なつた丁度その時、血みどろに染つた二つの死骸が転つてゐる実験室では、真夜中の十二時を報ずる柱時計が、ボーン、ボーンと、無気味な音をたてて、鳴り始めたのだった。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1931（昭和6）年12月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：ペガサス

2002年10月21日作成

2011年2月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

恐しき通夜

海野十三

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>